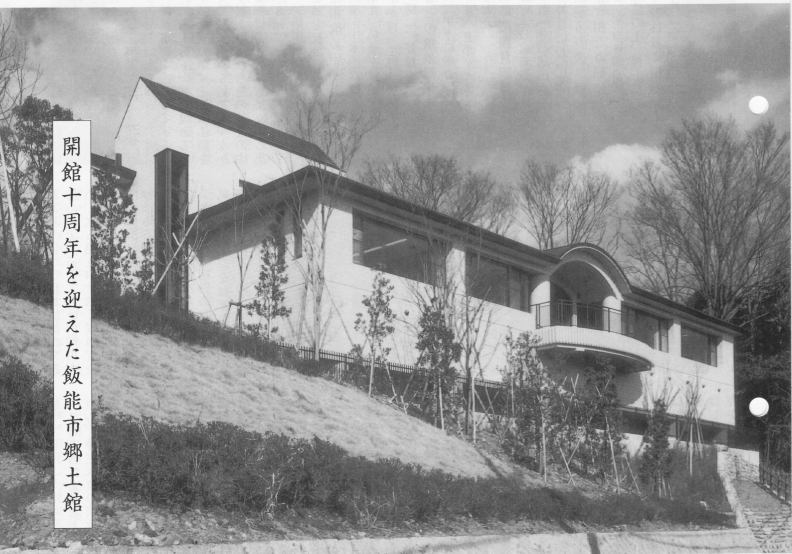


郷土ほんのり

第19号

開館十周年を迎えた飯能市郷土館



- | | |
|--------------------|---------------------------|
| ▶2頁……明治の神仏分離・大野邦弘 | ▶6頁……郷土史研・坂口新会長・井上前会長あいさつ |
| ▶3頁……こんにゃくの話・内野博司 | ▶7頁……小谷野寛一氏を偲ぶ・山川徳治 |
| ▶4頁……「古文書」のこと・浅見徳男 | ▶8頁……郷土館十周年に当って・宮前幸雄館長 |
| ▶5頁……飯能の古民家・丸山清 | 郷土史研究会の新役員紹介 |

明治維新の神仏分離と 埼玉の概況について

大野 邦弘

明治維新は、日本国にとっての一大政変であった。慶応三年十月十四日、徳川慶喜は、朝廷に大政を奉還し、王政復古の大号令のもと新しい時代へと変革していった。その維新の理念となったのは、天皇の祖先を中心にした尊王論であり、儒教、仏教および習合神道を批判して、

「一、中古以来、某権現あるいは牛頭天王の類、その他仏語を以て神号に相稱し候神社少なからず候、いづれもその神社の由緒委細に書き付け、早々申し出すべき候こと、

一、仏像を以て神体と致し候神社は、以来相改め申すべく候事、本地など唱え、仏像を社前にかかけ、あるいは、鬘に、梵鐘、仏具などの類置候分は、早々に取り除き申すべき事」と公布された。

次に閏四月四日には、大政官布告がなされ「今般諸国大小の神社において、神仏混淆の儀は御廃止に相なり候につき、別当僧侶の輩は還俗の上、神主大人等の称号に相転じ、神道をもつて勤仕いたすべく候。もしまたよんごころなき差し仕えこ

れあり、且つは仏教信仰にて還俗の儀不心得の輩は神動相止め、立ち退き申すべく候事、ただし還俗の者は僧位僧官返上は勿論に候。官位の儀はおつて御沙汰あるべく候間、当分のころ、衣服は風折烏帽子、淨衣白指貫着用動仕いたすべく候事。これまで神職相勤め候者も庶席の儀は、それぞれ伺い出、申しべく候、その上、お取り調べにて御沙汰これあるべく候

平安時代以来、神道の尊厳は、仏教の本地垂迹説によって混沌としてきた。まずは神道の純真さを取りもどさねばならなかった。したがって、神仏判然、神仏の分離は、維新の遂行にとって必然的な条件であった。

明治元年三月十七日、神祇事務局は諸社へ「王政復古、旧紙幣一洗なきせられ候に付き、諸国大小の神社において、僧形に別当あるいは社僧などと相唱え候輩は、復節仰せ出され候……」と通達を出し、次いで二十八日

は、神祇事務局達として、「一、中古以来、某権現あるいは牛頭天王の類、その他仏語を以て神号に相稱し候神社少なからず候、いづれもその神社の由緒委細に書き付け、早々申し出すべき候こと、

一、仏像を以て神体と致し候神社は、以来相改め申すべく候事、本地など唱え、仏像を社前にかかけ、あるいは、鬘に、梵鐘、仏具などの類置候分は、早々に取り除き申すべき事」と公布された。

各地で、仏像および経巻、法具などをごとごとく投げ捨てたり、火をつけて焼きすてたりされ一大暴動とまで到ったところもある。貴重な文化遺産が一挙に失われ、日本の文化が多大な損失をこうむったのは今になって残念と言うしかない。

○埼玉県における 神仏分離

埼玉県内における神仏分離は、比較的平穩に実施された、とされている。例えば、大宮の水川神社では、社僧であった、

水川大門の観音寺となり、仏像等は社外に移された。二の宮である。児玉郡神川村の金鐘神社は、別当寺であった。大光普照寺が境内から移転し、多宝塔た

れあり、且つは仏教信仰にて還俗の儀不心得の輩は神動相止め、立ち退き申すべく候事、ただし還俗の者は僧位僧官返上は勿論に候。官位の儀はおつて御沙汰あるべく候間、当分のころ、衣服は風折烏帽子、淨衣白指貫着用動仕いたすべく候事。これまで神職相勤め候者も庶席の儀は、それぞれ伺い出、申しべく候、その上、お取り調べにて御沙汰これあるべく候

各地で、仏像および経巻、法具などをごとごとく投げ捨てたり、火をつけて焼きすてたりされ一大暴動とまで到ったところもある。貴重な文化遺産が一挙に失われ、日本の文化が多大な損失をこうむったのは今になって残念と言うしかない。

飯能地域の神仏分離については詳細な文献等がまだ見い出されていないが、「新編武蔵風土記稿」記載の神社と現在とを比較すると、小さな判断できると思われる。小さな寺が多く廃寺となっており、特に原市場地区は顕著である。現在の飯能市は、高麗郡に属していたが、一

が神社の境内に残された。三峰神社は、もとは、天台宗寺門の聖護院支配であったが本山修験の三峰大権現であったが、三峰大明神と神号を改め、別当観音院以下四ヶ寺の供僧は還俗し、観音院正阿は、高室祥峰と改名し、最初の祠官となった。

三峰山の場合は、仏像、仏具等の廃毀は行われず済んだのは、全国でも珍しいことである。現在三峰博物館にはその仏像仏具等が収蔵されており、又江戸末から明治までの日鑑(日記)がこのこととして、維新の際の山の動き等が詳しく記載されており、貴重な資料として、文化財の県指定を受けている。



神仏分離令の被害を免れた三峰神社
(昨年郷土史研が訪問)

は、別当寺であった。大光普照寺が境内から移転し、多宝塔た

こんにやくの話

内野博司

埼玉県では秩父地方がこんにやくの産地として有名です。飯能でもこんにやくは細々ながら現在でも栽培されています。かつては飯能の山間部はかなり栽培されていて小産地を形成していました。

江戸時代の末に編集された「新編武蔵風土記稿」には吾野の高山の説明に「此山の名産は崑蕪にて、世に高山崑蕪と稱せ



郷土史研例会でコンニャクについて語る内野副会長

り」と書かれています。他の村の記載からはこんにやくがどれほど見られますが、「高山崑蕪」のような固有名詞は見だせません。たぶん高山は別の参詣者に食べられたものでしょう。

当時、こんにやくはポピュラーで、とりわけ江戸時代の町娘の間では人気があった食べ物のようにです。

こんにやくの歴史で重要な人物として、常陸の中島藤衛門があげられます。藤衛門は一七〇〇年代の後半にこんにやくの切つて乾燥し精粉を取り出すことを考案しました。精粉は、こんにやくが固まるための成分で、コンニャクマンナンと呼ばれる、じやがいもやさつまいも、澱粉にきわめて近い物です。澱粉を取り出すには、物をすりおろして水にさらして沈殿した澱粉を乾燥すれば良いのですが、コンニャクマンナンは同じ方法で水を吸収して糊になつてしまします。

重くて腐りやすいこんにやくをも輸送に便利な当時に加工することを江戸で、藩の財

政が豊かになり、幕末の表舞台に登場する一因となりました。なお、中島藤衛門は戦前修身の教科書に取り上げられました。

こんにやくの原産地はインドシナのあたりといわれています。その仲間は一三〇種もあり、なかには高さ三メートルにおよぶものも知られています。ところがそのなかでもこんにやくとして利用できるのはわずかに数種に限られます。

日本への伝来はいづつのかはわかりません。縄文時代であろうとする説や仏教とともに日本に入ってきたとする説もあります。文献によれば、中国では紀元三百年頃、日本では九百三十年頃にその名が見られます。

こんにやくは、ずいぶん変わった形態をしています。普通に見られるこんにやくは茎と多くの葉があるように感じられると思われませんが、実は、茎らしき部分は葉柄で、地上部は葉一枚ということとなります。

こんにやくの花が咲いたと珍しがられることがありますが、花は四、五年に一度分化して春に咲きます。大抵はそうなる前に掘られて食べられてしまします。同じサトイモ科のミズバショウの花に似ていますが、色は茶色から暗紫色です。その香り（というより「臭み」）は、肉の腐つたにおいがします。ハエはこのにおいにひきよせられてこ

武州一揆発生の地
早春の名栗村を訪ねる集い



一揆の首謀者豊五郎五代目新井さんの宅前で...

んにやくの受粉を手伝います。手作りこんにやくは市販のものよりおいしいと感じる人は多いようです。原料が生いもです。

いもありますが、それ以上に手作りゆえに製造の効率が悪く中に気泡が入り、かえて味がしみやすいかと思つています。

当郷土史研の二月定例会は二十八日に行い、早春の名栗村を訪ね、武州直直し一揆発生の地、名郷の二人の首謀者（大工紋次郎と桶職人豊五郎）の墓や関係する史跡などを見聞した。史跡めぐりにあつたのは紋次郎から五代目にあたる島田春男さんと豊五郎五代目の新井芳男さんとの協力をいただいた。参加者は坂口会長、井上前会長など十名に満たなかったが、それぞれ武州一揆により捕らえられ、江戸で牢死した紋次郎と豊五郎

が眠る墓や奥名栗の歴史を今に伝える松木観音堂、紋次郎が残した資料などを見聞、意義ある一日を過ごした。また名栗湖近くの切り通しに一揆をアレンジして描かれた壁画や一揆のかかわりが伝えられる竜泉寺を右に見ながら、名栗湖売店で休息、明治維新の二年前に発生、延べ二十万から三十万ともいわれる大群衆が荒れ狂つた武州一揆の流れなどを概要について講師の話の聞いた。

古文書

浅見徳男

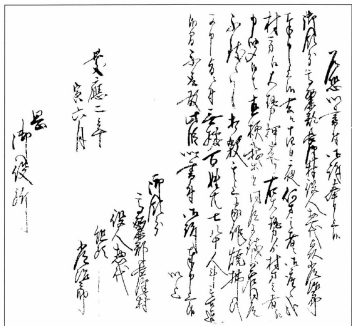
「一、古文書とは
「古文書」などという、アレ
ルギー反応をおこす人が多い。
しかし、外国語ではないし、
特別に捻ったものでもない。私
たちの先祖が日常的に書いてい
たものであり、親しみをもって
眺めていれば、自づと内容や訴
えていることは分かるものであ
る。

もちろん、人間が文字を発明
して以来、長い時の経過と必要
性から、文書(章)についてい
ろいろな約束ごとができてきて
はおり、それが読むことを難し
くしている面があることは確か
である。「歴史資料の一種で、
特定者に対して意志を表明する
方法」とし作成された書類、い

かえるとはつきりした差出者と
受取者のある書類を古文書とい
う」と、古文書学の上では定義
している。

しかし、これは学問の上のこ
とで、私たち素人は定義とは別
に、むかし書かれた文字資料は
古文書と読んで、さほど障りは
ないと考えている。従って、定
義されたもの以外で、良く見る
もの、「記録、日記、備忘録、留
書」などというものがあがる、
まとめて古文書とよんでいる。

また、布、
木、金石など
にかかれたも
のもあり、か
ならずしも紙
に書かれたも
のばかりでは
ない。因みに古文
書と似たよう
な言葉に「行
政文書」とい
うものがある
が、これは
「ぎょうせい
ぶんしょ」と
読む。



二、古文書の分類
古文書といっても種類が多く
いろいろな分類方法がある。し
かし一般的には書かれた時代に

よるもの、書いた人の所属によ
るもの二つに分かれるのであ
ろう。

前者は古代、中世、近世など
の時代分類。後者は公家文書、
武家文書、社寺文書、地方文書
（村方文書）など。このほかに
「巻子(巻き物)、折本、冊子、
摺紙、折紙、切紙などの形状分
類、和文体、漢文体、和様漢文
体、宣命体(漢字の音訓を借り
て)
国語の語格のまま記した上代文

が近世から明治初期に書かれた
もので、いわゆる地方文書(村
方文書)と呼ばれるもの(村
方文書)といわれ十七世紀から
十九世紀、およそ三百年の間に
書かれたものである。書風や書
体も、ほとんどが「お家流」と
呼ばれる書道の流派の書き方に
ならつては、いくつかの流れがあ
るが、その中に青蓮院流(お家
流)があり、京都の青蓮院門跡
尊円法親王を創始者とするもの
である。尊円流または粟田流な
どという呼び方もあるが、江戸
時代の公文書は、ほとんどこれ
によつて書かれている。

三、何故いま古文書か
大仰に言えば、国際問題、環
境問題、教育問題などなど。現
在起つている多くの問題は、先
人が何を考え、どのような行動
をしてきたのかという、歴史を
知らなければ現在は理解できな
い。

飯能市でも総合振興計画とい
うまちづくり計画を立てて、そ
の実現に励んでいるが、これに
は先人の足跡をたどらなければ
新たな方向は見えてこない。
この先人の行動や考え方を知
るひとつの手段が古文書という
ことになる。従つて、読むこと
自体が目的ではない。もちろん
読むことを楽しむことも

一向に差支えはないのだが、人
びとの動き、時代背景を知るこ
とは、もうと喜びが増すという
ものである。

庶民階層が文学を書くようにな
つて、たかだか三百年ほどの
行動や社会のしくみ、考え方が
どつわつたのにすぎないのだが、
ひとつひとつの資料を読み進ん
でいくと、その時代が彷彿とし
てくるものである。

その延長線上に現在があり、
時間も空間もつながっているの
であるから、何とも不思議な感
ずらる。この先に未来が創造
されることは、まこと楽しいこ
とではある。

四、古文書の勉強会

飯能市郷土館では、開館以来
教育普及活動の一環として「古
文書講座」を何回か実施してき
た。その講座が終了すると、受
講者の中から「このまま終わっ
てしまふと忘れてしまふ」とい
う声が出てきて、グループを結成
して活動を続けていくこととし
た。今でも二つのグループは、一
か月に二回の学習活動を続けて
おり、メンバーの方々は大変熱
心で積極的である。
読むだけでなく、会話をまじ
えながらの楽しい学習となつて
おり、ときにテキストに出てく
る地名をたどつて、現地見学な
り

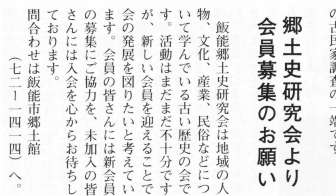
―五頁下段へ続く―

飯能の古民家

丸山清

平成六年から七年にかけて、飯能全域の調査を行いました。訪問させて頂いた家は約二百五十軒に及びました。どのような方法で調査をするか組立てに約半月はかかりました。すでに県 halves の調査を委嘱されていた神社、仏園を含む「民間庭園調査」が平成四年から始まっていたので既に訪問済の家を再度訪問した家もかなりありました。

対象となる「古民家」の家には、大なり小なり「築山・池・庭」等必ずといってよいくらいあるのです。古民家調査をして、ある程度共通な点を箇条書きしててみますと(1)江戸時代後期から明治時代中期のものが多かった。(2)それらの家の歴史は三百年位だが、一回は火災に遭っている。(3)建築材は、自分の持ち山のものを使っている。(4)大きな石を据えての庭をもっている。(5)先祖は士族か名主・神官・漢方医・学者・文人等が出ている。(6)立派な神棚・仏壇、床の間がある。(7)軸物・武具・美術工芸品・古文書がある。(8)釜室、機(はた)場がある。(9)建物の土台に大きな自然石を使っている。(10)鍛冶屋がつくった釘を使っている以外殆ど釘は使っていない。



いる以外殆ど釘は使っていない。決められた紙面の都合上書くことができないが、おおまかに別けると、町家(まちや)といっは商家と住まいだけのものではおのずとその構造が違う。市街地内で特異性のあるもので、あさひ銀行飯能支店の向い側にある「飯能織物協同組合」の建物は当市内に残る事業所としては唯一の木造建築の粋をつくした。また最近取こわした

「飯能光機」の正門を入った右手に洋館の社員クラブがあった。中は鹿鳴館(ろくめいかん)を偲ばせるようなクラシックで気品をただよせるシャンデリア・ステンドグラス・装飾つきの階段の手すり・調査に入った時、思わず素晴らしいと思いました。建築した時そのままの日本建築の美を備えていた「東雲亭」は今も無く、二丁目の「結城屋」(平沼さん)宅も最近つくり建て替えてしまった。残るは料亭「煙屋」さん、この室内は清潔で奥ゆかしく、御殿造り、書院造りもあり材料も素晴らしく気品に溢れています。屋根材に使われたものに茅(かや)・藁・杉皮・松皮葺(ひ

わだぶき)字のとおり、松の皮で葺いた屋根。一般庶民の家の屋根は、草葺きか、板葺きが続いたようです。今でも附属屋で見かけることがありますが、押入に屋根の上には石が並べられています。

東吾野地内の旧家で「土蔵が五つあった家」の話ですが、金蔵・質蔵・穀蔵・味噌醤油蔵、まさかと思うでしょうが「薪炭蔵」江戸城や領主様等へ献上する御用の品を入れたおいたまです。例え屋根があつてもむき出しに外へは置かなかつたそうです。

古民家は中身が濃く奥が深いので話すこと書くことは山ほどあります。これはかいつまんでの古民家調査の一端です。

郷土史研究会より
会員募集のお願い

飯能郷土史研究会は地域の人

物、文化、産業、民俗などについて学んでいる古い歴史の会です。活動はまだまだ不十分ですが、新しい会員を迎えることで会の発展を図りたいと考えています。会員の皆さんには新会員の募集にご協力を、未加入の皆さんには入会を心からお待ちしております。

問合わせは飯能市郷土館

(七二一四一四)へ。

一四頁より
ども実施した。文字の上で考えていた平面的な想像も、より具体的に、立体的な想像ができたのではないかと思っている。紙簿の関係から、ひとつだけ資料を紹介すると、赤沢村(原市場)の赤沢地区は、当時独立した村だったの幕末の御用留(領主)からの通知を書き留めた書想)を見ると、一橋家の家臣であった渋沢成一郎(飯能戦争の首魁)の二弟が、農民兵の徴募に飯能地方を訪れている。一見、飯能地方だけのことが書かれている資料と見えたものが、折から放映されているNHKの大河ドラマ「徳川慶喜」の史実にも関係のあることになり、途端に資料そのものが精彩を放つてくる。このように、内容によってはときに心おどるようなものもあり、無上の喜びに浸ることもある。

も、古文書に興味があり、一緒に勉強してみたいと思われる方が居れば、先ほどの郷土館で定期的に学習会を行っているグループに話してみたいと思います。多分、飲んで迎えてくれるだろうと思えます。

難しくみえる古文書も、考えようによつて、人生を幅広く楽ししてくるものかも知れません。



初心にかえって

坂口 和子

飯能市郷土史研究会は、創立以来三十年近い活動を続けている歴史のある会です。このたび井上峰次会長のとをひききつぎ浅学非才をかえりみず会長の大役をお引受けいたしました。どうか今まで同様、ご支援、ご協力を賜わりたくお願いいたします。この会の伝統をひききつぎ、これからよりよい発展をしていくためにもそのような活動をしていくべきか、どんな目標を掲げたらよいか、ぜひ一緒に考えていただきます。そして、お考えいただく機会を

いただき、皆さまにお尋ねいただきました。郷土史研究会にお入りになった動機について、
 一、郷土史研究会にお入りになった動機について、
 二、あなたにも大なり小なりきつかけがあるかと思えます。
 三、知人が入っていた。友人に誘われた。郷土の歴史を知りたいと思う。何となく郷土史が好き。日本の風土と歴史に関心をもっている。祭りや行事などの独特な民俗に関心がある。写真の被写体として郷土をとりたいたい。同じ趣味の友人を作りたい。さてあなたはどこに○をつけ

られるのでしょうか。
 一、会員になって当初の目標が満たされましたか。
 二、満足。満足しつつある状態。全く期待外れ。別のものが見えてきてより関心をもつようになった。意見や提案をもつようになった。あなたはどこに○をつけますか。
 三、つまり当初の目的と現在がどう関わりしているかをもう一度考えてみたいのです。
 四、研究会活動を活性化すること、発展につながるという認識から、年間行事の運営をしていきます。しかし役員さんの努力にも拘らず行事の参加者は常に低調です。これではよいのだろうかという反省が主催者側には当然ありまして、あるいはもっと

別の方向の活動が求められているかどうか、が最も知りたいところであります。良い運営、たのしく学び語りあえる活動をどこに求めたらよいのでしょうか。会員の皆さまのご意見をぜひお聞かせください。
 現在考えられる案として、郷土史という漠然としたテーマをもう少し具体的に、郷土史のなかの何かをテーマに選び、一年を通じてそれを追跡してみるという方法。つまり年間テーマをきめて皆でとりくむという案。もう一つはグループを作つてそれぞれ活動を進め、一年間の発表を行うという方法。こちらはテーマよりグループ主体という案。などが考えられます。しか

しいずれにしろ皆さまの要望が見えなくては計画の立てようがないのです。
 ここで、初心にかえって、を提唱したいと思います。自分は郷土史研に何を期待したのかを郷土史研の活動はその上に築かれるべきであり、また協調して何かを成しとげていく喜びを共有する仲間育ての会でもあると思えます。
 郷土史研が発足した当時の熱気を再びと願うのも、郷土大好き人間の集合体になり可能性をこの会は充実に持っていることを確信するからです。皆さまのご理解と提案を切にお待ちしております。

懐古と期望と

一 お礼にかえて

井上峰治



振り返ってみるともうひと昔も前、まだ昭和の年代に新井清寿先生のご退任のあとをうけて、私が飯能郷土史研の会長をお引受けしました。郷土史については摘み食い程度、組織については非力な私が、組織の古い会員だからと言うことでこの任にあたることは不本意でした。

役員の方々が力点をおいたのは、「組織の強化、拡大と若がえり」「隔月に事業を行う」「担当会報制」「事後学習」「年一回の会報の発行」などでした。それが確実に実施されると

会員も増え、会が活性化されました。例会への出席も増えて、事業がどうやら軌道にのつたように記憶しています。事業へ会員の参加が増え、社会にも認められ、地方新聞に書かれたり、(尤も会員の幹部が記者でした)平成六年には県の文化としてもしつ賞を、四年には飯能文化賞を受けました。

調査、研究、郷土史研の本来的な調査、研究、発表等が定まらないうまま、個々の活動に任ざられていた。そして見学会の主催団体的な面だけが目立つようになり、時に自立の中からも、郷土史研の事業への

取組みに対する批判も出されました。郷土史研の役員の方々、とりわけ常任の皆さんが、仕事と他の諸会務を並行させることは、並大抵のことではありませぬ。まして三年、五年と経過すれば必然的にマンネリ化が避けられず、事業が形骸化してきます。私にはこれを修復する時間も力もないまま時が経ち、これ以上放置すれば郷土史研の前途が危ういと感じました。そこで会長の辞任を申し入れ、しかるべき方へお願いしたかったのです。幸いなことにこの会には、創立者の赤田さんや、歴代の会長さんが

培った人材が多く控えています。まして坂口新会長は文学、歴史、美術の造詣が深く、組織の舵取りにも妙を得た才色兼備の方です。私の及ばないところを充足していただくことは間違いないと存じます。

新生飯能郷土史研の前途は約束されたと思えます。私も今後は一会員として、会の活動に参加させていただきます。

長いこと非力の会長を支えていただいた皆様、厚くお礼を申し述べ、会の伸展をお祈りしてご挨拶にかえさせていただきます。

小谷野先生と私

山川 徳 治

サッと決め、サッと行、結果は後からついてくる。先生の生き方は私にはこの様に写る。昭和二十年後半、私の結婚も先生一流の此のやり方でサッと飯高近くに間借りして戴き、サッと押し込まれたようなものだった。当時、先生の住まいは広小路近くの郵便局の隣で、毎晩のようにも風呂、風呂に入れば家族には無頓着、損得無しだ。縦に長い家で薄暗いが温かい風呂場、ぼんやりと白い土蔵。そして、やさしい大がらなおおぼちゃん、の着物姿が目につく。その後同じような、六、七組が集まって（先生を囲む会）として今日まで続いているが、まったく先生には厄介になりっぱなしだった。



故・小谷野寛一氏
飯能郷土史研・顧問

おおくはお嫌いだ。もつともあまり達筆なので難解な文字もあり、文の前後から判読する事も多かったが、すべて対等に考えああたたい手紙で最も。詩吟に關しては最も強力な応援者であった。公民館活動の一環として詩吟の指導を始めた事で詩吟の先生に曲解され困っていた時、従来宗家制度に疑問をもっていた先生は「山川君、かまうことはないから自分で流派を作ってしまう。」例によって行方事は早い。「飯能だから椋心流がいい、さつそく流派を立てるといふことで立流大会を開いて独立しろ。」と、立流記念の手ぬぐい（郷土の心をかか吟ずる）、椋心流詩会立流記念）まで書いてくれた。それながら手ぬぐいの（郷土の心をあなたが吟ずる）の（郷土の心をあなたが吟ずる）は、漢詩の吟詠にはそぐわないように思いますが、先生にはもつと深い思いやりがあったのである。会員には東北、関西と出身の違う者も多く、それぞれが生まれ育った古里のにおいを保持している。そして吟ずる漢詩、和歌にも郷土の心は生きていた。あらためてこの飯能郷土史研の会報「郷土はんのう」の題字に、手ぬぐいの「郷土の心をあなたが吟ずる」に、先生の郷土を愛する深い思いが込められているのを感じるのである。

竹寺に歌碑が立てられた時が、先生のハイライトであり、「みんなこのようにして来た、これ以上のことはない。」と手放しの喜びようだった。教員時代の教え子の奉仕、大勢の議員、飯能の参加の中、家族、孫に囲まれた笑顔は忘れられない。椋心流詩会の十周年記念大会の際、歌祝として選ばれた、大木の歌が祝文に戴かれたのも偶然。吟詠会員と共にその朗詠をさせていただいた。祝宴の席では「山川君、こゝ、こゝ」と言って御家族と同席で、先生の喜び、幸せが伝わ、何とも嬉しかった。

飯能の文化活動の先駆者と言われるにふさわしく、おおよけにはむくわれないであろうあらゆる文化活動に手を染められたその啓蒙、貢献は計り知れない。特に短歌の普及、民俗学の調査などには日夜没頭された。このように先生が好きな事、好きな道をひたはしたのも、家族の理解があればこそである。奥さんは内助にてつておられ、野菜作り等はこちらまで新鮮なものを度々頂戴した。御子息の「看病するように来た、初めて家族のもとに帰ってきた感じがした」の挨拶は実感がこもり改めて申し訳なきに涙したのであった。

徳・小谷野寛一氏

吉田 靖

「民俗の友ら集いて古き世の悲しき寛事（ひえ）め」
飯能郷土史研究会の顧問であり、「飯能市史」の編集協力者であり、飯能歌人会の初代会長でもあった小谷野寛一氏が逝つて速くも一周忌が迫ってきた。振り返ると、あの方くらい郷土文化の興隆に意を尽くされた人は希有だったように思う。特に氏のライフワークともいえる「民俗茶ばなし」上下編は市民に大きな話題を提供した。斯くいう筆者も郷土史研究会に入会したのも「民俗茶ばなし」を読んだことだった。それまでは民俗の「ミ」の字も知らず、関心も無かった。そんな中で出会ったのが「民俗茶ばなし」であった。

吾野のだれ平さんから聞いたお盆行事、原市場のまる子さんから聞いた正月行事、精明のだれ男さんから聞いた「おしら講」や神社への代参など農家の

八十八歳を迎え、その天命を知ることくサツサツと身辺をかたづけられ、そしてその人生をとり戻された。まことに見事であり、畏敬の念を禁じ得ないのであります。

信仰、等々、初めて聞いたこと、懐かしいこと、感心すること、哀しいことなどがギョギョシリつまっており、こうした聞き書き調査はさぞ骨の折れる作業だったに違いないと、心打たれたものだった。

懐かしさ、心打たれる書は世に数多い。が、民俗茶ばなしのように読み終えると、民俗は民族の足跡であり、これを鏡として、どこを守らなければならぬか、どこが素敵で、どこが問題なのか、何を切り捨てなければならぬかを、書かずして教えている。このような著書はそうさらにはあるまい。

すべては民俗茶ばなしを通して、すべの歴史の学び方を示唆したように思える。

地道な聞き書きを何年となく続けられた氏の努力には自ずか頭が下がるのを禁じ得ない。

このような努力家が飯能郷土史研究会の会員として、顧問として存在されたことを誇りに思う一人である。

先生、どうぞ安らかに眠り下さい。

新会長に坂口和子さん

「郷土史研」の新しい役員

飯能郷土史研究会(会員数九十七名)の平成十年度総会は昨年六月二十八日に開催、事業計画や会則の一部改正、副会長の二名から三名に、役員改選などを行った。役員改選では会長として長年にわたり会の発展に尽くされた井上峰次氏が勇退され、新会長には坂口和子氏が選出されたほか、次の人々が役員に選出された。(任期二年、新旧会長挨拶は四頁に)

会長・坂口和子(小瀬戸)、副会長(二名)内野博司(下畑)大野邦弘(南)吉田靖(下加治)▽監事・浅見賢治(飯能)金子仙太郎(北川)▽理事・加藤義雄(仲町)森田伍助(飯能)関根美智子(前ヶ貫)西野長治(岩沢)丸山清(川寺)青木晃平(笠縫)岸道生(中藤上郷)西村一男(下赤上)浅見徳男(北川)▽事務局・金子聰子(郷土館)

郷土館館長 宮前幸雄

郷土館

開館十周年目を迎えて

郷土館もおかげさまで、開館十年目を迎えることができました。これも、館を支えてくださった市民の皆さんのご協力の賜物と感謝しております。これまで、館に対する認識を高めるため、また、博物館活動の基本である「調査・研究、収集・保存、教育普及」の中の教育普及の一つとして特別展を中心とした活動を行ってきました。結果、少しづつではあります。が、館の存在が市民の中に定着しつつあるように感じます。さて、十年が経過して館としては、これまでの活動を見直し、これからの活動の方向付けをしていく時期に入ります。今まで、特別展の企画委員会、展

「私の宝物展」など 郷土館の事業計画

- ◆特別展「収蔵品展」美術品を中心に「して」五月九日(日)まで開催
- ◆「私のたからもの展」(仮称)十月中旬より十一月下旬(予定)
- ◆「飯能スポーツ展」(仮称)一月下旬より三月上旬(予定)
- ◆その他の展示「双木本家飯能焼きコレクション」展Ⅶ 七月下旬より八月下旬(予定)
- ◆「中学生社会科研究展」九月中旬より九月下旬(予定)
- ◎「特別展関連講演会」

各特別展ごとに開催を予定しています。くわしくは、事前のポスター、ちらしにてご確認下さい。

- ◎定点撮影プロジェクト'99 昨年度行った、定点撮影の今年度版。五月頃撮影会を行い、六月中旬から七月上旬まで展示を予定しています。
- ◎夏休み子ども歴史教室 八月上旬
- 子ども対象の体験学習会
- ◎民俗調査講座(仮称) 六月頃、もしも八月頃開催予定です。詳細が決まり次第、広報はんのう等でお知らせします。

示室監視の補助など、多くの方の参加により活動が運営されてきました。この形は、これからも続けていきたいと考えています。さて、今までの以上に必要とされてくるでしょう。「博物館の存在意義、地域博物館のあるべき姿」というのは、開館当初からの課題です。十年たつた今でも、はっきりした答えは出ていません。大きな博物館と同じことはできなくても、郷土館でなくてはできないことが、郷土館であるはずなんです。ここに「郷土館らしさ」が生まれてくるような気がします。その為にも、もう一度、歴史を学ぶ意味を問い直し、飯能市の特色だした活動、運営ができるか?

新入会員の紹介

石井英子(小瀬戸)
志村珠子(美杉台)

郷土史研究会では引き続き会員を募集しています。
(問い合わせは郷土館へ)

あとがき

「テレビゲームが流行った十数年前から、子供たちの活字離れが目立つようになった。図書館に見える子供たちの数も、それまでの増加から減少へと向かった。そして今度はインターネット。大人まで「活字離れが広がっている……」▼所沢の図書館に勤める知人の嘆きである。そういえば上尾高校で生徒アンケートを実施したところ、八十パーセントが「マンガは見るが小説はほとんど読まない」との回答を寄せたと報じられていた。同校にかぎらず世の活字離れは広がっているらしい▼本紙を編集しながら、いつどのくらいの人に読んでもらえるのか、いさか不安な思いにかられている。「郷土はんのう」に仕上げたいと心は焦るのだが、なんとしても編集者がこの浅学非才ではどうにも……。 (清流)

郷土はんのう 第19号

発行日・平成十一年三月三十一日

発行所・飯能郷土史研究会

〒315-0063 飯能市飯能二五八一

飯能市郷土館内

(三五七〇〇六三)

題字・小谷野寛一
表紙写真・郷土館提供